

DEBUT 首長

福岡県行橋市長 田中 純氏

縦割り脱却へ横断的チーム 企業誘致や農業振興に全力



たなか・じゅん 1946年福岡県行橋市生まれ。71年京都大学教育学部卒、旧大蔵省入省。同省国際金融局、外務省在ブラジル日本大使館などを経て85年退職。同年、貿易業の田中企画を創立。2011年に福岡県議会議員。14年3月に8度目の出馬で行橋市長に当選。67歳。

福岡県行橋市 福岡県の東部に位置し、北九州市から約25km。電車で30分と同市からは通勤圏内として近年、ベッドタウン化が進む。農業のほか、周防灘に面し漁業も盛ん。ロームやTOTOなどの工場が立地する。

——8度目の出馬で当選を果たした。これまで苦労が絶えなかったのでは。原動力は何だったか。

選挙に関して苦労はなかった。選挙戦の時期が来れば気の知れたチームが集まって、終われば解散して日常生活に戻る。その繰り返しだった。ただ、当選した時はさすがにほっとした。

高齢化が進む故郷をもっと元気にしたいという思いが強かった。どうすればローカルの地方都市としていい形で生き残れるか。行橋市は自然に恵まれた田園地帯が広がり、海にも面しているため気候・風土を生かした街づくりが不可欠だと考えている。幸いこれまでも行政の世界にいたので、業務上の法律や慣行などを理解するための「思考パターン」は身につけている。

これまでの経験が生かせる。

——市の人口は7万人を超え増加傾向にある一方、65歳以上の占める割合は全体の約25%と高齢化が進む。農業や工業の担い手不足が懸念される。

課題解決にはスピード感が大切。縦割り行政をなくすため、当選直後から横断的なチーム制を敷いた。課をまたいだ案件は進行が遅くなりがちだからだ。現在、4つのチームが動いている。市街地の再開発絡みで進むPFI（民間資金を活用した社会資本整備）を利用した図書館建設にも生かされている。

農業については柿やイチジクの生産が盛んだが、国からの資金面での支援では限界がある。もうかる体制にするにはブランドを育成することに加え、販路を開拓するのが有効。自治体一丸となって、海外を含め大都市圏への流通経路を確保したい。

高齢者比率は若者人口を増やせば薄まる。魅力ある企業が集積すれば雇用が増え、住みたいと思う若者も拡大する。そのため、選挙公約でも掲げた企業誘

致に全力で取り組む。これまでの人脈を生かし海外でもセールスする。

市内にはすでに工場集積地はあるが、利便性をさらに高めるため、高速のインターチェンジ付近で新たに「工業団地」を作りたいと考えている。

——福岡県内では昨年の全国学力テストで平均正答率が小中学校ともに全国平均を下回った教科も。教育面の整備も必要だ。

「住みやすい街」にするには教育も大切。まずはきめ細かい授業をするため、先生1人あたりの生徒数を減らしたい。他の自治体では1クラス20人を目指す所もある。また、教職員OBを活用して空き教室で無料塾を手掛けるなどの先進的な事例も取り入れたい。英語の授業には低学年から積極的にネイティブの先生を配属させたい。（聞き手は

西部支社 高野 壮一）